

A. Giddens 後期近代論と感情の社会史研究の架橋の可能性

——振舞のコードとしての「ほんものらしさ (authenticity)」について——

立命館大学大学院 谷原 吏

1 目的

この報告の目的は A. Giddens の後期近代論と、感情の社会史研究を結びつけることにより、後期近代における相互行為にはたらく規範の内実と機能を明らかにすることである。 現代社会においては、様々な技術や人工知能が加速度的に発展し、人間が行う作業がますますそれらに代替されるといわれている。人工知能では代替困難といわれている、社会性や信頼関係の構築が求められる相互行為の価値は今後ますます上昇するだろう。「同調圧力」や「空気を読むこと」など、対人関係上生じる困難を説明するための様々な言説が流布して久しいが、対人関係上の相互行為から生じる「生きづらさ」の構造を明らかにし、時代の診断を行っていくために、「何が起きているか」を精確に描き出す社会学的知見が求められている。

2 方法

着眼せねばならないのは「振舞のコード」である。N. Elias がマナーブックの歴史を辿ることにより文明化の過程を描き出したように、振舞のコードは、「社会的に要求されたものと禁止されたものの標準」(Elias 1969=1977:59) であり、人間関係における秩序を維持している重要な要素である。人々は日々「適切に」振舞うことを迫られており、振舞のコードから逸脱することは、精神病質であるとみなされることにすらつながるのである。家系や地縁等の外部的権威が希薄化し、選択の基準が自己の内部に求められる後期近代 (Giddens, 1991) においては特に、人々がどのような振舞を許容する／禁止するのかが相互行為にはたらく規範を示すシグナルになり得ると考えられる。本報告は、感情やマナーの社会史研究等を参照し、それらを後期近代論の視点から捉え直すことにより、後期近代の相互行為を規定してきた振舞のコードの内実及び機能を明らかにする。

3 結論

ギデنزは、近現代の道徳規範として authenticity という概念を提出している (Giddens 1991=2005 等)。近現代においては、近代以前にあったような家系等の依るべき外的基準がないために、「ほんとうの」自分とは何か、「ほんとうに」自分が欲するものとは何かということ問い続けて自己アイデンティティを形成し、それを基準に選択を行っていくというのである。一方、他者との関係構築の際にも authenticity が要求されていることを示す研究も数多く報告されている。例えばマナーの社会史研究においては、現代に近づくほど authentic であることが求められていることが指摘されている (Wouters 2007 は、19 世紀末以降現代までのマナーブックの記述の変遷を調査した)。つまり、相手が「ほんとうに」思っていることは何かということが重要視されているのである。以上から、後期近代における人間関係にはたらく振舞のコードとして「ほんものらしさ (authenticity)」を記述できるのではないかという仮説を構築できる。次にその機能については、前期近代における支配的な振舞のコードであり「差異化」として機能していた respectability と、authenticity を比較検証し、ギデنزの信頼論を参照することにより検討した。その結果、authenticity の確認を通じて、相手の言動の「ほんもの」具合を確認することにより「コミットメントの共有」(共同で従事しているある事象について同じ程度の深さでコミットしていることを確認する) がなされ、「信頼」の構築がなされているのではないかということが示唆された。

文献

Elias, Norbert, *Über den prozess der Zivilisation Vol.I*. 1969=1977, 赤井慧爾・中村元保・吉田正勝訳『文明化の過程 I』法政大学出版。

Giddens, Anthony, 1991=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ：後期近代における自己と社会』ハーベスト社。

Wouters, Cas, 2007, *Informalization Manners & Emotions since 1890*, London: SAGE Publications.